被災地復興 デザインで後押し

崇城大生が作品展

鶴屋あすまで

熊本地震からの復興をテーマにした崇城大芸術学部デザイン学科の展覧会「みらいデザインｋｕｍａｍｏｔｏ」が9日、熊本市中央区の鶴屋百貨店鶴屋ホールで始まった。学生らが被災住民らにヒントをもらいながら、さまざまなデザインを考案。制作した作品で復興を後押ししている。作品展示は11日まで。

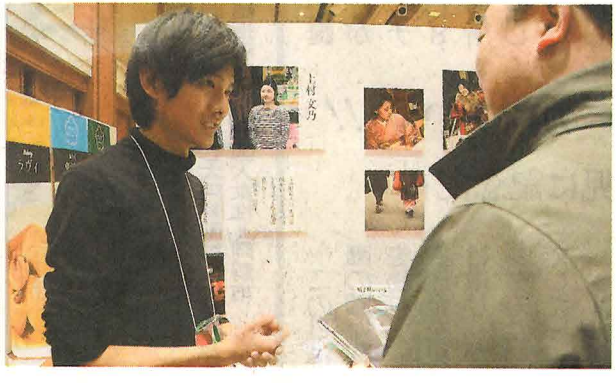
1年を通じた授業の一環で、1～3年生の約100人が14チームに分かれ、住民の話などを基にデザインを発想、必要な作品に仕上げた。

2年の石尾絵理華さんら3人は、被災者の実話に基づき絵本を制作。翻訳家のお年寄りと孫が、ボランティアの力添えで笑顔を取り戻していくストーリーとした。会場には絵本の原画を展示。石尾さんは「助け合いの精神や感謝の気持ちを伝えることの大切さを感じてもらえたら」と話す。

別のチームは、多数の町屋が被害を受けた熊本市の「新町・古町地区」を取材。街並み保存に取り組む人たちのインタビューを基に75ページの写真集を作った。

倒壊した木山神宮（益城町）の復興を願う「絵馬」、非常食の備蓄状況と消費期限が一目で分かるようにした「表示板」なども並んでいる。

（中原功一朗）



町屋が被害を受けた地区の写真集を作製。展示写真などについて説明する学生（左）＝熊本市中央区

非常食の備蓄状況と消費期限が分かるようにした表示板

災害時の食の大切さを伝える漫画

2018年3月10日　熊本日日新聞　P.16